

オゾン層観測速報

平成 12 年 11 月 20 日 (1/4)

気象庁オゾン層情報センター

オゾン全量 (2000 年 10 月)

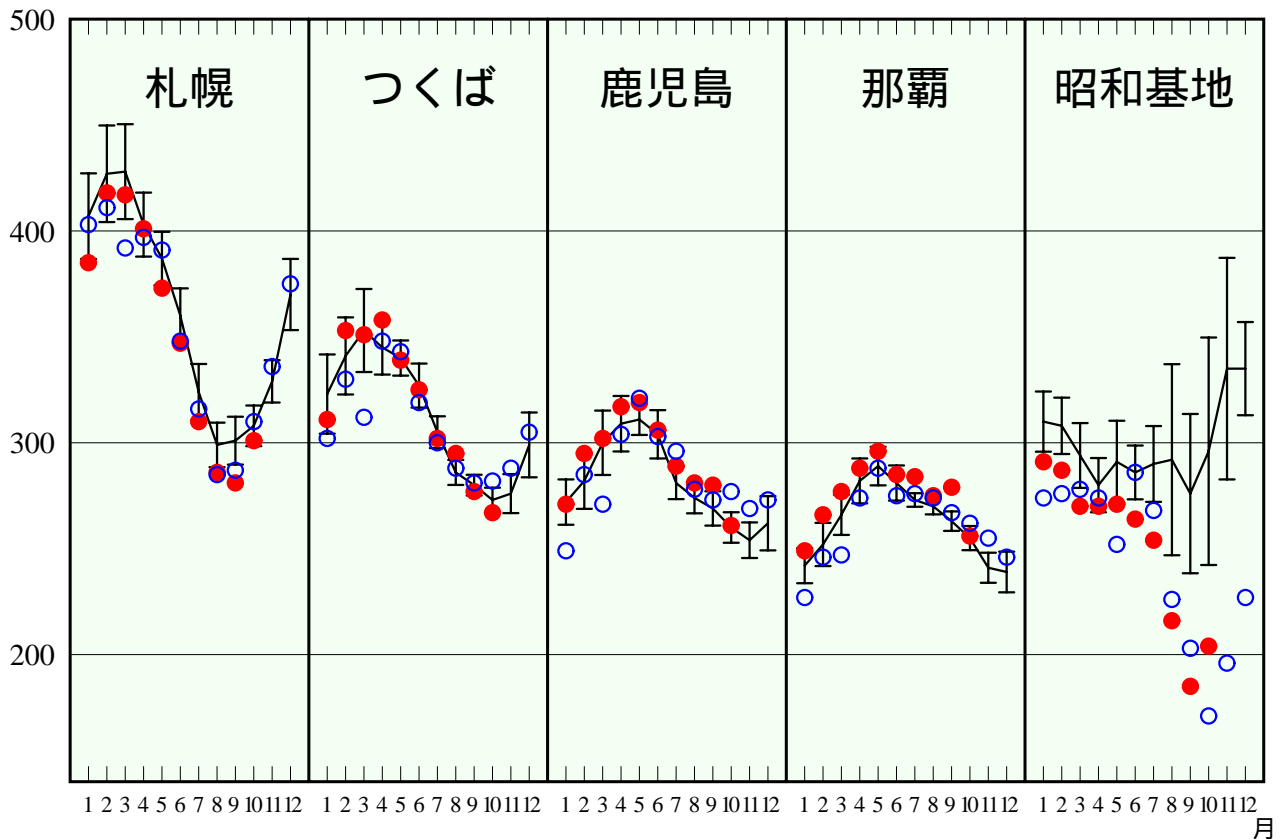
[概況]

2000 年 10 月の国内 4 地点及び南極昭和基地における月平均オゾン全量¹⁾は、札幌、鹿児島、那覇では平年並、つくば、昭和基地では平年に比べて少なかった。

[観測結果]

	札幌	つくば	鹿児島	那覇	昭和基地
オゾン全量 (m atm-cm)	301	267	261	256	204
平年差 (m atm-cm)	-7	-6	+1	+1	-92
平年比偏差 (%)	-2.3	-2.2	+0.4	+0.4	-31.1

(m atm-cm)



(国内 4 地点及び南極昭和基地におけるオゾン全量)

は 2000 年の月平均値、 は 1999 年の月平均値を示す。実線は平年値²⁾、縦実線は標準偏差を示す。

- 注 1) オゾン全量：ある地点の上空に存在するオゾンの総量を表す。大気の上端から下端までの全層に存在するオゾン全てを仮に地表付近に集め、これを 0、1 気圧にしたときの厚さをいう。cm 単位での数値を 1000 倍して m atm-cm (ミリアトモセンチメートル) という単位で表す。ドブソンユニット (DU) ともいう。
- 2) 平年値：1961～1990 年の月別累年平均値、ただし那覇は 1974～1990 年。平年差が標準偏差以内にあるときは「平年並」、それより大きいときを「多い」、それより小さいときを「少ない」とする。

オゾン層観測速報

平成 12 年 11 月 20 日 (2/4)

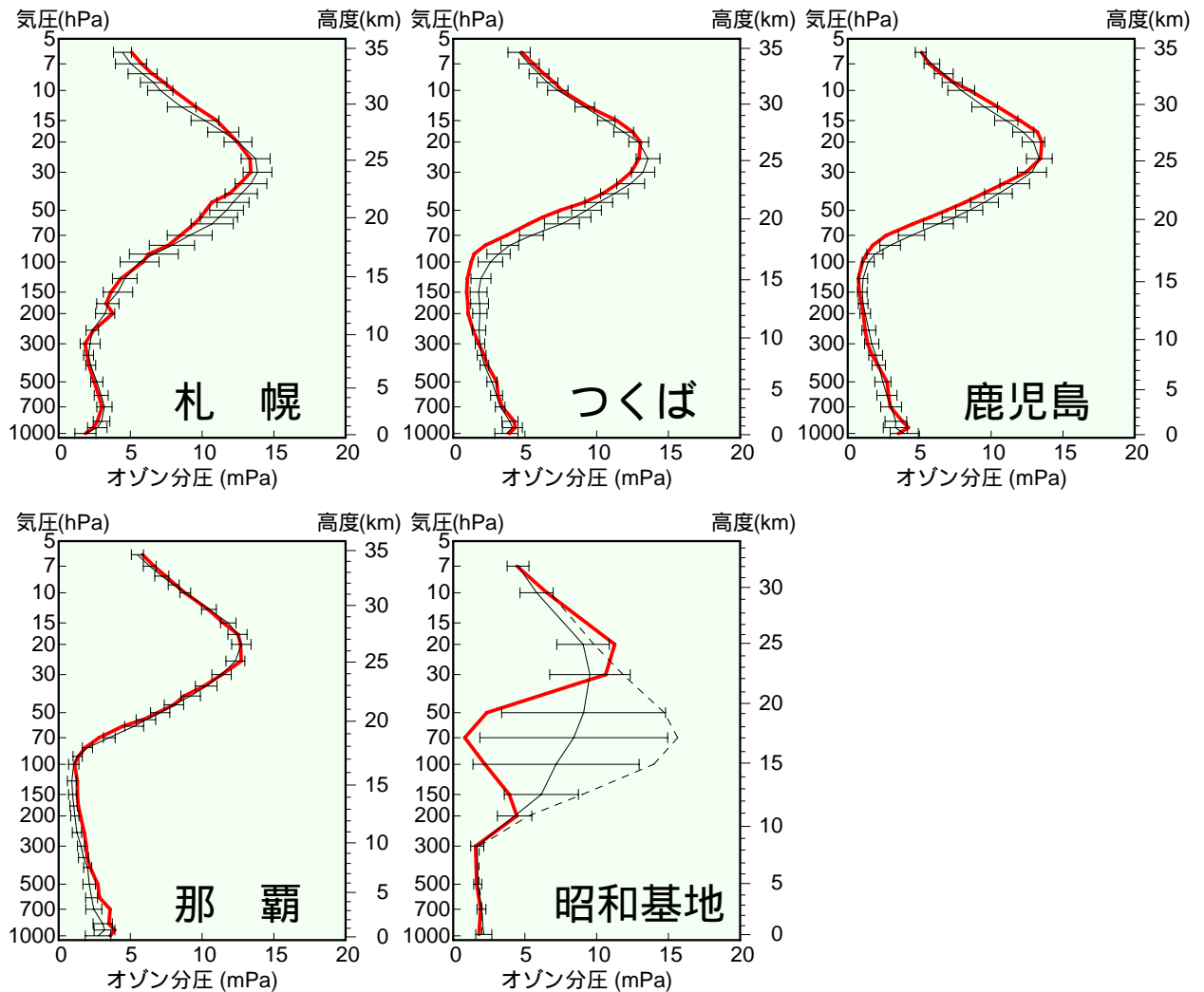
気象庁オゾン層情報センター

オゾンの高度分布 (2000年10月)

[概況]

2000 年 10 月の国内 4 地点及び南極昭和基地におけるオゾンゾンデ観測によると、各高度のオゾン分圧¹⁾は、札幌の高度 30~31km、35km 付近、鹿児島 of 28~30km、那覇の高度 3~6 km、10~15km、昭和基地の高度 25km 付近で平年に比べて高かった。また、札幌の高度 21km 付近、つくばの高度 12~21km、鹿児島 of 17~22km、那覇の高度 19~20km、昭和基地 of 高度 17~19km で平年に比べて低かった。昭和基地においては、オゾンホールが明瞭に現れる以前の 1968~1980 年の平均と比べると高度 12~19km で低かった。

[観測結果]



(国内 4 地点及び南極昭和基地におけるオゾン分圧の高度分布)

太実線は 2000 年 10 月の月平均値、細実線は 10 月の平年値²⁾、横細実線は標準偏差を示す。

なお、昭和基地の点線はオゾンホールが明瞭に現れる以前 (1968~1980 年) の 10 月の月平均値を示す。

- 注 1) オゾン分圧: ある高さでの大気の圧力 (気圧) は、各種気体成分の圧力 (分圧) の総和であり、オゾンが占める圧力をオゾン分圧という。「オゾン分圧が高い」とは、その高さにおけるオゾンの量が多いということである。なお、気象庁では 2000 年 1 月より、オゾン分圧の単位を μmb (マイクロミバール) から mPa (ミリパスカル) へと変更した ($1\text{mPa}=10\mu\text{mb}$)。
- 2) 平年値: 1968~1999 年の月別累年平均値、ただし那覇は 1989~1999 年。平年差が標準偏差以内にあるときは「平年並」、それより大きいときを「高い」、それより小さいときを「低い」とする。

オゾン層観測速報

平成 12 年 11 月 20 日 (3 / 4)

気象庁オゾン層情報センター

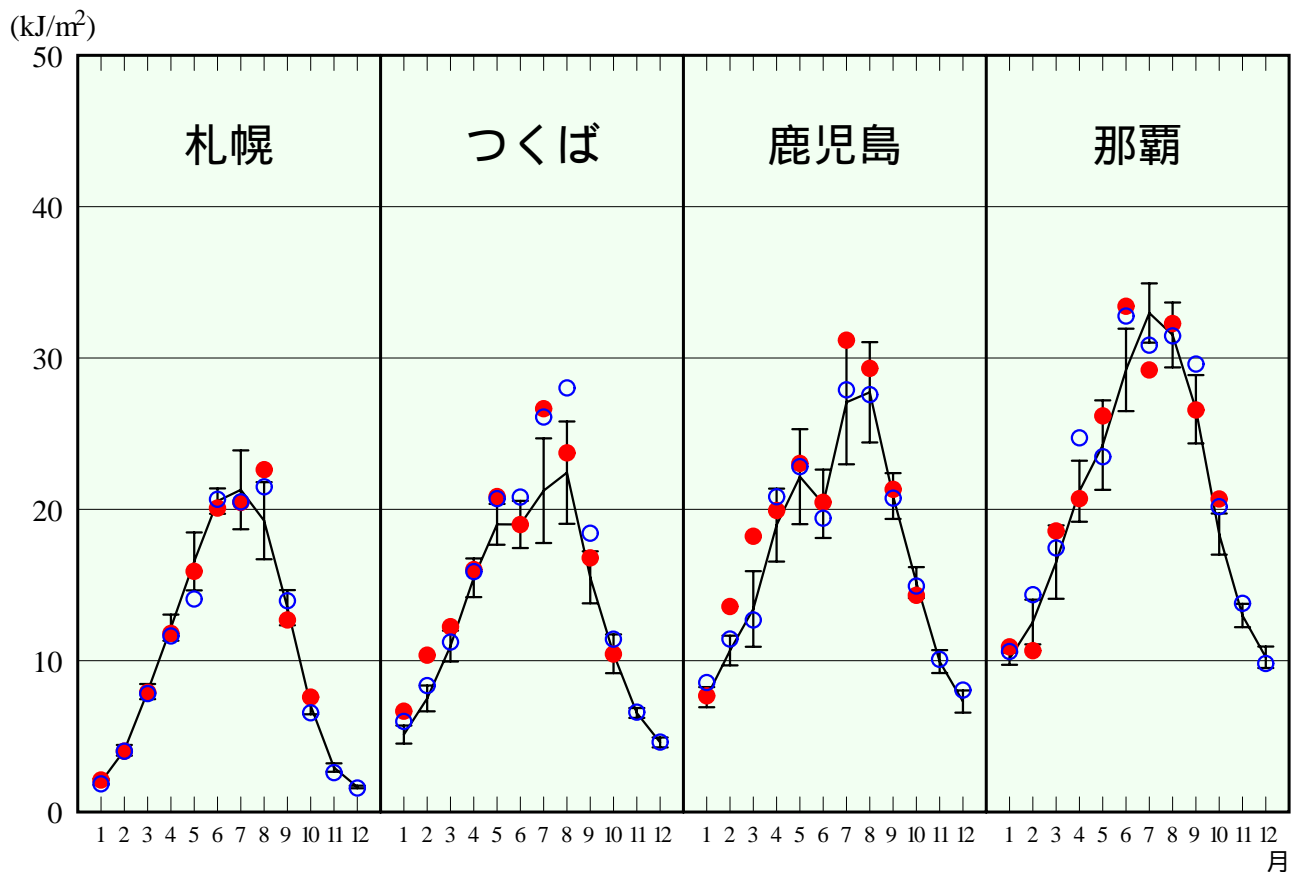
日積算 UV - B 量 (2000 年 10 月)

[概況]

2000 年 10 月の国内 4 地点における日積算 UV - B 量¹⁾の月平均値は、累年平均値²⁾に比べて、札幌、つくば、鹿児島で並、那覇で多かった。

[観測結果]

	札幌	つくば	鹿児島	那覇
日積算 UV - B 量 (kJ/m ²)	7.59	10.44	14.33	20.69
累年平均値からの偏差 (kJ/m ²)	+0.57	-0.02	-0.84	+2.32
偏差の累年平均値との比 (%)	+8	-0	-6	+13



は 2000 年の月平均値、 は 1999 年の月平均値を示す。実線は累年平均値、縦実線は標準偏差を示す。

注 1) 日積算 UV - B 量 : 波長が 280 ~ 315nm (ナノメートル) の紫外域日射量の日積算値。
 2) 累年平均値 : 1991 ~ 1999 年の 9 年間の月別累年平均値、ただし、つくばは 1990 ~ 1999 年の 10 年間。2000 年の観測値と累年平均値との差が標準偏差以内にあるときには「並」、それより大きいときを「多い」、それより小さいときを「少ない」とする。

オゾン層観測速報

平成 12 年 11 月 20 日 (4 / 4)

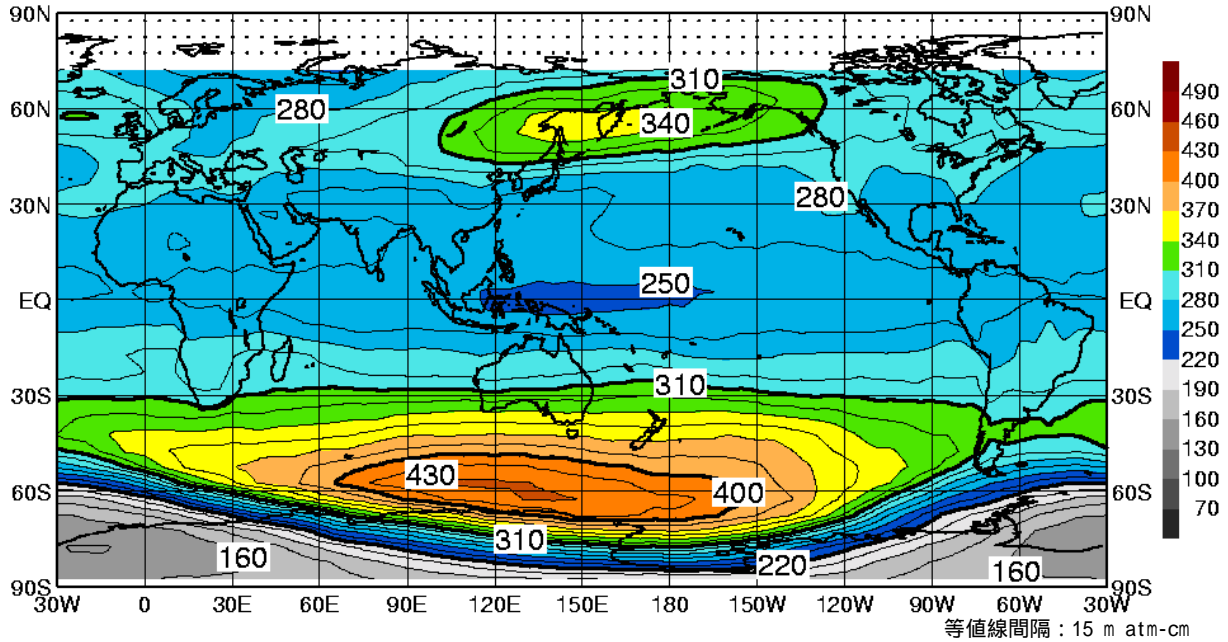
気象庁オゾン層情報センター

世界のオゾン全量分布 (2000年10月)

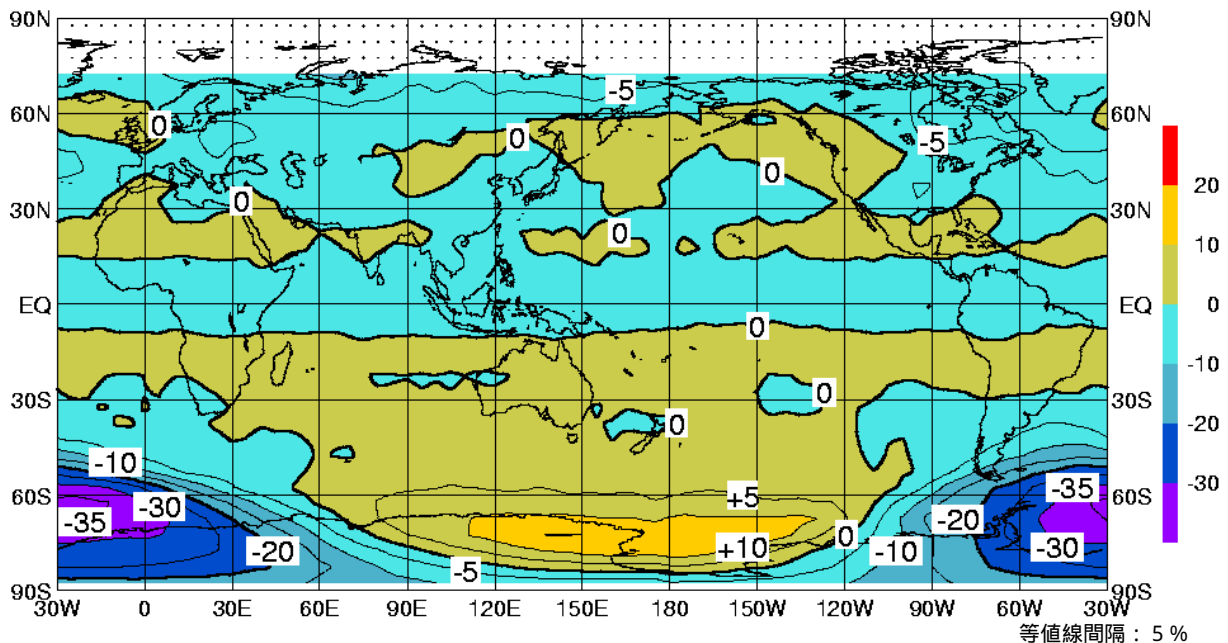
[概況]

衛星観測資料によると 2000 年 10 月の月平均オゾン全量は、平年値¹⁾に比べて 10% を超える正偏差領域が東経 120 度 ~ 180 度 ~ 西経 120 度付近の南極大陸とその周辺で見られ、10% を超える負偏差領域が西経 120 度 ~ 0 度 ~ 東経 90 度付近の南極大陸とその周辺で見られた。10 月に南極大陸とその周辺で 10% を超える正偏差領域が見られたのは、1996 年以來 4 年ぶりである。

オゾン全量分布



平年値からの偏差



米国航空宇宙局(NASA)のアースプローブ衛星(Earth Probe)に搭載された TOMS データ (TOMS: オゾン全量マッピング光計) に気象庁が観測した値との比較検討を加えて作成した。

なお、2000 年 6 月の観測データより、オゾン全量分布の図の等値線間隔を 25 m atm-cm 毎から 15 m atm-cm 毎に変更した。

注 1) 平年値: 1979 ~ 1992 年の月別累年平均値

注 2) 極域における網掛け領域は、太陽高度角との関係からデータの取得できない領域を示す。